

手漕ぎボートからの転落事故について

発生日時：2021.05.30（日） 15:00 ころ

発生場所：大尻沼（標高 1,400m） ボート乗り場から右岸約 50m 地点。手漕ぎボート乗船中（単身）。

天候：晴れ 気温は測っていないが、この時期としては割と高め。水温（表層）12℃

服装他：下は防寒を兼ね、ビニールコーティングされた漁業用つなぎの防水ズボン、ニーブーツ着用。上は身動きがとり易いゴアテックス素材の着丈が短めのウエーディングジャケット着用。腰巻型手動膨張式ライフジャケット着用。

事故発生当時は南寄りの風が強く、特に事故地点は局所的に風の通り道となり、ボートがなかなか定位置に停められない状況。何度か停留を試みるもアンカーが効かず、やっと効いたところで、不用意に立ち上がってしまった。が、不意打ちを喰ったかのように、タイミング悪く横からの波でボートが大きく傾いた。

めまいがした訳ではないが、不意に足元をすくわれるように見事にバランスを崩してしまふ。あまり安定の良いボート（キール付き）ではないので、無理に足掻いても転覆の恐れがあることは分かっていた。とっさの判断であったが、気が付いたときにはなすが儘に船外へ。しかも無意識の内にもボートの縁にしっかりしがみついていた。

自分でもあまりの冷静さに気持ちが悪いくらいであった。それでも右手はライフジャケットの手動レバーの位置に（これは日頃の訓練の賜物であろうか？）！

ボートから離れてしまったのであれば、当然のこと、ライフジャケットは開いていたはずである。ただし、ボートにつかまっている状況で腰巻型手動膨張式ライフジャケットを開いてしまうと、体とボートとの間に空間ができ、縁につかまっていたのであればボートの安定性に欠ける。勿論、這い上がろうとすればボートは転覆を免れない。この場合はボートに静かにつかまったまま、一旦、岸に上がるしかない。

幸い少し離れたところには幾艘ものボートがアンカーを下ろしている。大声で仲間に救助を求めると、3艘のボートが駆けつけてくれ、そのまま、一旦、近くの岸へ上陸。後は、自力でボートに乗り込み、ボート乗り場へ（事なきを得た）。

今回は単に幸運が重なったに過ぎず、決して笑い話では済まされない。

以下、今回の事故で得られた教訓を思いついたままに・・・・・・

(1) 自分が着用するライフジャケットは、いざというときにどのように作動するか知っておく必要がある。

(2) 自分が着用するライフジャケットは正しく作動するかどうか定期的に確認しておく必要がある。例えば、古くなるとボンベに十分なガスが充てんされているとは限らない。また、古くなると気室の折れ目が固着し、気室が正常な形で開かない場合がある。私が使用しているものをテストしたときには左右の片側が開かず歪な形で開き、手で揉むなどしてやっと正常な形に開いた。もし、今回、それを知らずに手動レバーを引いてしまったのでは、場合によっては顔が水面に着いたり、パニック状態に陥った可能性がある。

(3) 年のせいかどうかは分からないが、ボートを降り、着替えをするまでズボンや下着が乾いているように感じていた(冷たく感じていなかった)。水温が12℃なので、長い間水中にあっては低体温症になってもおかしくはないのではないだろうか？ 靴下を脱いだ時には両足の甲が紫色を帯びていた。どうやら、感覚を失っていたようである(危険！)。

(4) 内水面においては(海面と異なり、転落後、短時間でボートから離れてしまうことはまれであり、船縁で頭を打ったりして意識がなくなることもまれである)、ボートから離れてしまったときは別とし、ライフジャケットを開くか開かないかは、状況によって自由度を持ちたい。固定式、あるいは自動膨張式のものを着用していると、場合によってはかえって安全な行動に支障を与えかねない。

(5) 内水面と言えど、ボート内で立ち上がる際には風や波の様子を確認し、不用意には決して立ち上がらないこと。キール付きの手漕ぎボートは思っている以上に不安定である。

(6) 袖口がネオプレーンで雨水が侵入しにくい構造の上着を着ていたので、防水機能のないスマートウォッチでも事なきを得た(被害が発生せずに済んだ)。

(7) 大自然はいつ状況が変わるか予測のつかないことがある。それも、極めて局所的に。決して何時如何なるときでも自分を過信してはならない。常に謙虚な心づもりで！

(8) (4)とは相反するが、運悪くめまいなど病的な原因で転落した場合、頭を打ちつけて気を失ってしまったような場合には、手動膨張式のライフジャケットを着用していたのでは機能しない。着用すべきライフジャケットの選択には難しい面がある。

まとめ

今回はたまたま幸運が重なった一例に過ぎず、事故は様々な条件下で発生するものである。事故が起こらないに越したことはないが、日頃から事故が発生した時に備え、自分が装着するライフジャケットに対する知識の取得、水難訓練は最低限必要なことと考える。

今回の事故で得られた教訓は、今回発生した事故の環境下では役に立つと思われるが、事故発生時の環境如何では対応の仕方が正反対となる場合もあるかもしれない。

一旦、事故が起こってしまうと、本人が危険な目に合うのみでなく様々な方に迷惑をかけることになる。

如何なる環境下でも落ち着いて対応できるように、(事故例の情報を収集・蓄積し) 予め水難事故の対処方法を知っておくのは釣り人の心得の一つではないだろうか。

以上

東京都釣りインストラクター連絡機構 鈴木伸一